

カラ・アザール症に用ふる化學療法劑の 治效檢定に關する一新法に就て

木 村 研 究 室

醫 學 士 大 月 明

醫 學 士 南 保 吉 郎

緒 言

化學療法の研究に治效檢定に關する動物實驗が一半の重要な役割を演ずることは縷説するまでもない。

カラ・アザールに於ては、Young & Smyly (1924) 及び Mayer (1926) により、Hamster (*Cricetulus griseus et frumentarius*) が本症に對して高き感受性を有することが報告せられて以來、動物實驗の道が啓かれ、こゝに實驗的化學療法の研究は急速な進歩を來し、遂に Solustibosan (Sdt. 561) の如き優秀な製劑の出現するに到つたことは周知のところである。

然しながら、我國では Hamster の入手は不可能であり、Hamster に匹敵する感受性動物として石井 (1938) は縞栗鼠を提唱したが、縞栗鼠も亦隨時入手の困難な事情下にある。余等は、之に代るべき方法として家兎辜丸内接種法による治效檢定實驗を行ひ、ほゞ目的に適ふことを知つたので、これを報告する。

實 驗 そ の 一

家兎辜丸内接種法

家兎辜丸内に原蟲 (*Leishmania* 型) を接種すれば 100 % 感染した。

原蟲の辜丸内に於ける消長は、接種後 3—4 週間より増殖優勢となり、この時期に於て辜丸穿刺を行へば、塗抹標本に於て殆ど毎常原蟲を證明し得た。その後原蟲は更に増殖を續け、接種後 8 週の辜丸塗抹標本では、毎常 1 視野、數 10 個の原蟲の存在するを認めた。この成績は感染縞栗鼠に於ける脾又は骨髓所見と比較すれば、やゝ劣るも、接種後 2 ヶ月以内に於ける辜丸内原蟲の消長を指標として治效檢定實驗を行へば、自然治癒の有無を論外に置いて實驗を進めうる事を示すものである。

(本實驗の詳細に就ては、日本微生物學病理學雜誌に報告の豫定である)。

實 驗 その二

治效檢定實驗

供試製劑は、化學研究所發生研究室に於て合成せられた Stibin 酸有機誘導體であつて、その構造は次の如くである。

Db-44, p-Aminophenylstibinsäures Diäthylamin (Sb 含量 33.28%)

實驗法. 家兎辜丸内接種後 4 週に於て、辜丸穿刺法により感染を確認し、直に治療にかゝる。

製劑は 5% 葡萄糖水溶液に 1—2% 濃度に溶解して直に使用する。藥液の 1 回注射量は 15 回投與總量が 500, 250, 150, 100, 50 mg Sb となる如く算出し、之を耳靜脈内に注射した。

治療は、連續 5 回注射を以て 1 療程となし、2 日の間隔を置いて 3 療程を反覆した。

判定は、最後の注射より 1 週間後に行ひ、無菌的に剔出した辜丸に就て染色法及び培養法を施して原蟲の有無を檢査した。

實驗成績. 表示の如くであつて、Db の感染家兎に對する D. C. M. は體重 2 kg に就き、250 mg Sb である。

尙、自下、兩他の製劑に就ても實驗中であつて、その成績は近く一括して報告する。

製劑 (Sb %)	感染證明 (辜丸穿刺)		濃度 (%)	治 重 2kg 一回量	療 就 回数	キ 投與總量 Sb mg	成 績 辜丸内原蟲所見		培養
	右	左					塗抹標本	右 左	
Db-44 (33.28%)	+	+	2.0	5 cc	15	500	—	—	—
	+	+	〃	〃	〃	500	tot		
	+	+	1.0	5	15	250	—	—	—
	+	+	〃	〃	〃	250	—	—	—
	+	+	1.0	3	15	150	—	—	+
	+	+	〃	〃	〃	150	(+)	—	+
	+	+	1.0	1	15	50	++	++	++
	+	+	〃	〃	〃	50	++	++	++
對 照	+	+					+++	+++	
	+	+					+++	+++	

註 (+)ハ原形質崩壞シ染色性減退シタ原蟲ノ存在ヲ示ス